

## 研究報告

# レディース・ジャケットへのジャッカ・カミーチャの応用研究 Applied Research on ‘*Giacca Camicia*’ (Shirts Jacket) for Woman’s Jackets

Bunka Fashion Graduate University  
Sachiko Kubo

文化ファッション大学院大学  
准教授 久保 幸子

**要旨：**近年、サステナビリティの観点から、ファスト・ファッションへの批判的な意識が高まり、本格的な仕立ての服を長く着用するという意識が芽生え始めている。レディースの既製服は、一過性の流行を追い求めるために、工程を削ぎ落とし、低コストを実現しているが、その中で耐久性があり、着心地の良さを実現しているとは言い難い衣服が生産されている。そこで、レディースの服飾生産にも応用可能なイタリアン・ジャケットの仕立て方の一つであるジャッカ・カミーチャ（シャツ仕立て）の軽やかなメンズ・ビスポークの縫製技術を学び、レディース・ジャケットへの応用を研究する。

## 1. はじめに

19世紀末以後、工業の機械化が進み、機械による衣服の大量生産体制が整うとともに、仕立て服によって各々の身体に衣服を合わせるという着装方法から、既製服の中で身体に合う服を選ぶという現在に至るまでの着装方法が用意された。コストが下がり、気の向くままに衣服を選び、着替え、忘れ捨てることができるようになった一方で、仕立て服の生産を支えていた技術は、より簡易的で機械縫製のしやすい方法へと置き換えられて行き、その中で仕立て服の技術は失われつつある。そして、着心地や各々の身体に合うというフィッティングの概念もまた、その基準が失われつつあると言える。しかし、近年、サステナビリティの観点から、ファスト・ファッションに対する批判的な視点が生まれ、本格的な仕立ての服を長く着用するという意識が芽生え始めている。

また、レディースのブランドにおいても、メンズライクなジャケットや本格的なテーラリングが求められている。これは、ファスト・ファッション（使い捨ての時代）の終わりの始まりであり、長く着用するためにしっかりとした服作りを望んだ結果の本物志向の要請であると思われる。しかし現在のレディースの既製服の服作りは工程を削ぎ落とし、女性の軽やかさを表現する反面、長く着用するための耐久性は十分とは言えない。

イタリアン・ジャケットの仕立て方の一つであるジャッカ・カミーチャはシャツ仕立てのジャケットの意味であり、軽やかで着心地の良いジャケットのことである。そこで、レディースのテーラリングにも応用可能なジャッカ・カミーチャ仕立てのメンズ・ビスポークの縫製工程を学び、レディース・ジャケットに応用する。

---

提出年月日：2019年1月15日

受理年月日：2019年2月28日

## 2. 既製服レディース・ジャケットの現状と仕立て

通常、ジャケットには芯地、伸び止めテープなどの副資材を使用して保型の一助としている。現在、多くの既製服のレディース・ジャケットは接着芯地を使用しており、ブランドやデザインによっても差異はあるが、ベーシックなジャケットの場合、表地の前身頃と見返し、上衿両面には全面に接着芯地を貼り、後ろ身頃に背芯、裾と袖口には部分的に接着芯地を貼る。接着伸び止めテープはラベルの返り線、前後ネックライン、アームホール、ゴージライン、前端見返し端付近まで貼る。使用箇所により、数種類の接着伸び止めテープを使い分ける。また、肩パッド、衿綿を入れることが多い。その他、胸増芯を使用する。

1959年にピエール・カルダンがプレタポルテを発表して以来、日本においても高度成長とともに、素材・資材の開発や工業機器が発達し、既製服の生産システムが確立していった。合成繊維、半合成繊維などの新製品が開発されると、表素材は薄くしなやかになり、当然副資材も薄く軽く仕上げられるためのものが開発されていった。バブル期にはデザインや素材の流行も手伝いさらに、薄く、軽やかに仕上げることが至上命題にまでなった。芯地にはのりを裏面に貼った接着芯地が使用され、伸び止めテープも裏ののりがあらかじめ添付されており、アイロンの熱でのりを溶かして表地に接着するようになった。このように市場の要求に伴い、副資材が発達し、アパレルメーカーでは、QR（クイック・レスポンス）や品質管理を重視するようになった。仕立て服の生産システムを支えていた縫製技術は、これらの技術開発の助けもあり、より簡易的で機械縫製のしやすい方法へと置き換えられていった。レディース・ジャケットの作成方法も同様に、手仕事から専用のミシンなどの機器に置き換えられ、簡素化されていった。このこ

とにより、コストは削減され、価格は安くなったが、縫製も簡素化され、シルエットは平面的なものとなり、長く着用されないものに移りかわっていった。軽やかなジャケットが製造されるようになった反面、くせ取り等のアイロン技術による立体造形やまつり、ほし止めといった手仕事の縫製技術、耐久性が失われていった。このことにより、高速回転の工業用ミシンで縫製された衣服は糸の収縮に乏しく、身体の動きを阻害し、人体の動きに追従しない柔軟性に乏しい着心地の悪い衣服ができてしまっていないだろうか。また、接着芯地を使用することによって、通気性が阻害され、くせ取りなどのアイロン操作をしても、貼った状態に戻ろうとする力が働き、平面的なジャケットができていないのではないか。

## 3. ジャッカ・カミーチャについて

ジャッカ・カミーチャとはイタリアン・ジャケットの仕立て方法の一つでシャツのように軽いジャケットの仕立て方法の呼称である。通常のメンズ・ジャケットを仕立てる時には副資材として、肩パッド、衿綿、肩バス、胸バス、フェルト等の芯やパッドを使用するが、<sup>注1</sup> ジャッカ・カミーチャ仕立ては、肩周辺を補強するそれらの芯やパッドを使用しない。肩とアームホールのみ部分的に麻芯と毛芯を増芯しているが、主に一枚芯でドレープを保型している仕立てである。<sup>図1</sup> このように副資材を極力減らし、工業用ミシンのように、強い均一な力で縫製せず、手縫いで適切な力を用いて甘く縫うことによって、軽やかさが実現するとともに、着心地の柔らかさが生まれている。

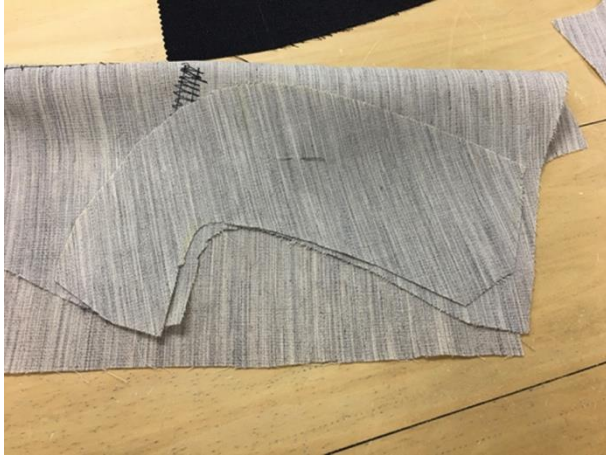


図1 ジャッカ・カミーチャのドレープを支える毛芯

#### 4. ジャッカ・カミーチャの仕立て：メンズ・ジャケットを例として

本研究ではジャッカ・カミーチャ仕立てのメンズ・ビスポークの縫製工程を学び、レディース・ジャケットに応用するため、メンズ・ジャケットを作成した。表地はカノニコ社<sup>注2</sup>製のトロピカル、ウール100%、色はダークグレー、目付けは390g/mの生地を使用した。トロピカルウールではあるが、真夏以外のスリーシーズン着用できる比較的張りのある目付けもしっかりした素材を使用した。

##### 4-1. 裁断<sup>図2</sup>

仮縫い前の裁断は前身頃、後ろ身頃、外袖、内袖、見返しの計5パーツの裁断をおこなった。表地の上にパターンを置き、粗裁ちの状態にチャコ（チョークのことをいう）で縫い代を書き、裁ちハサミで1パーツずつ裁断をする。

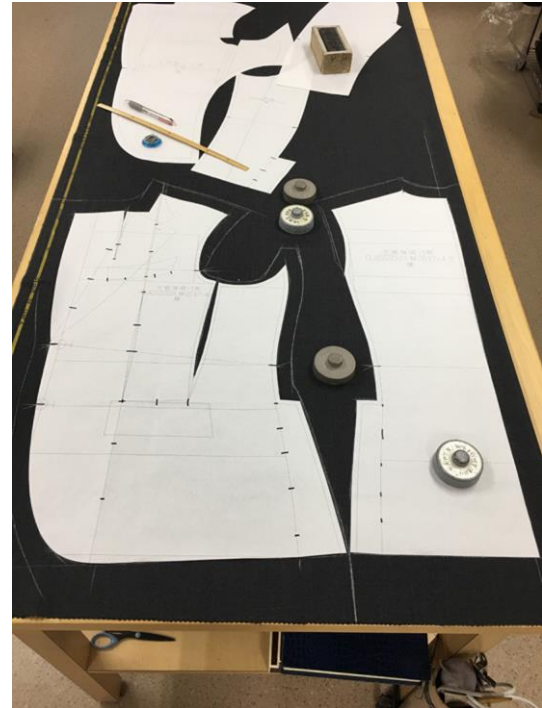


図2 裁断

##### 4-2. 切躰（きりびつけ）<sup>図3 注3</sup>

日本式の切躰は白毛（しろも）<sup>注4</sup>を二本取りで行うが、イタリア式の切躰は白毛一本取りで行う。柴山氏は「イタリアでスーツをオーダー体験した時、仮縫い状態を見たら切躰が長く付いているので大雑把だなあと考えたものでしたが、よく見たら一本糸なのでこれなら間も切りやすいし、不要になったら手ですぐに引き抜くことができます（日本は短くカットするので毛抜きでないと取りにくい）。日本の仮縫いは見てくれは良いのに対し、イタリアのは見てくれは悪いが着た時にでき上がりのラインがよく出ています。」<sup>注5</sup>と著書で語っている。筆者も白毛1本で行なう切躰は初めての体験であったが、慣れると日本式の切躰より早く印付けをすることができ、合理的であると感じた。白毛1本で行うと当然2本で行うより細く印付けができるので、より正確なライン取りができるようになる。



図3 切糞

#### 4-3. くせ取り

後ろ身頃のくせ取りは、肩甲骨の高さを補い、前肩を助け、上腕骨頭の隆起に沿わせ、腕の運動を妨げないための空間を作る役割を担う。前身頃は胸の厚みの立体感を出し、ヒップ位置ではヒップの丸みをなだらかに包み込む形状を作るために行う。くせ取りは各工程で適宜行う。

イタリアの服づくりでは重量のある電気乾アイロンを使用し、<sup>図4</sup>その熱を十分に加えて曲げることにより立体感を表現している。現在サルトリア・イプシロンで使用している電気アイロンはイタリア製で重量が5kgある。生地の上に電気アイロンをのせ、1分間以上放置している。生地が焼けてしまわないか心配する位に、アイロンの押さえは時間をかけて行う。サルトリア・イプシロンのサルトである船橋氏のくせ取り風景はくせ取り作業をしているというより、生地と対話をしているような、生地をなだめているような雰囲気さえ感じる。



図4.電気乾アイロン

#### 4-4. 毛芯作り<sup>注6 図5</sup>

日本のメンズ・ジャケットの仕立てでは通常、台芯、胸バス、フェルト、肩バスと主に四種類の毛芯を使用し、肩周辺の保形とドレープをキープするが、今回のジャッカ・カミーチャ仕立てはシャツのような軽い仕立てのため、胸バス、フェルトは使用せず、アームホールと前肩、後ネックライン、前裾、ラペルの見返し裏部分のみに補強と保形のために芯を据える。毛芯は主にイタリア製のウールとコットンの混紡のものを使用した。<sup>注7</sup>台芯のダーツはつき合わせ、裏地の当て布をしてコバステッチで当て布の両脇をたたき、更に、千鳥にミシンをかける。アームホールは台芯と同じ毛芯で増芯し、白毛で粗くハ刺しをする。前端裾部分とラペル部分にはのり抜き柔らかいシーチングを使用する。前端裾部分はゆとりを入れ縦に2.5cm 間隔くらいに低速ミシンでステッチをかける。ラペル部分は表地と毛芯の間に挟み、返り線奥をしつけで止める。ラペルの下側7~8cmの返り線までの部分はラペルがめくれると表から見えてしまう部分なので、ラペルが柔らかく返るように、白毛で粗めに据えておく。

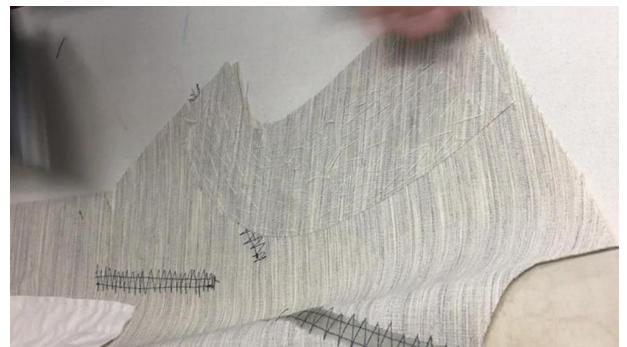


図5 毛芯作り



#### 4-5. 芯据え (仮縫い前) 図6



図6 芯据え (仮縫い前)

立体的な形体を崩さないように、なるべく立体的な形体を作ったまま、表地と芯を手で縫い合わせていく。

#### 4-6. 組み立て

前身頃に見返しを合わせ、縫い代を折り込み、ラペル端を白毛で縫い合わせる。返り線を白毛でからげ、返り線を表地側から止める。ラペルを返し、返り線より 5cm 位の位置には芯地だけに止める。見返しの鎌底部分は邪魔にならないようにたたんでおく。見返し側から前端裾を折り込み、駸をする。見返し裾は芯のみに白毛で止める。後身頃は仮縫い用の半裏地を仮止めし、前身頃と脇線を白毛で縫い合わせる。肩のいせを逃がさないように縫い合わせる。仮縫い用の後ろ裏地の肩を折り込み、肩線に止め付ける。

仮縫い時、上衿はあらかじめ作成されていた衿ゲージを縫い付ける。衿ゲージとはカラークロスに毛芯を据え、ハ刺しをしたもので、表衿を掛けていない状態のものをいう。

二枚袖は前側の切り替えのみ中表にミシンで縫い合わせ縫い代を割り、後ろの切り替えは白毛で縫い合わせ、袖山をいせながら、アームホールに付けていく。 図7



図7 仮縫い用袖つけ

#### 4-7. 仮縫い用組立て (前身頃・脇身頃・後ろ身頃)

図8, 9, 10



図8 組立て前身頃



図9 組立て左袖



図10 組立て後ろ身頃

#### 4-8. 仮縫い（フィッティング）

1 回目の仮縫いは、組み立てられたジャケットが体型と合っているかを確認する作業である。仮縫いは船橋幸彦氏の特許である「前後のバランス

理論」に基づき、行われた。「前後のバランス理論」は別名「やじろべえ理論」と言われ、首からオリジナルのメジャーをぶら下げ、「頸椎7番」と「胸椎1番」の間を計測し、支点の位置を正確に確認する。次に「胸鎖乳突筋」近くのポイントを正確に確認し、そこから直下した地面までの距離を左右4か所計測する。これにより「左肩と右肩の高さの違い」や「前後の傾き具合」が分かる。すなわち、この採寸法により人体の左右差や屈伸体型や反身体型など体型の特徴を数値で正確に把握し、フィッティングに反映する。正確に採寸した寸法を基に、作成されたジャケットを白毛で組立て、仮縫いをおこなう。

フィッティング時には姿勢の特徴や体型の特徴、（屈伸体か反身体か、なで肩であるかいかり肩であるか、突き皺や襷皺が出ていないか、肩甲骨の張り具合はどうか）などの体型にジャケットを合わせる補正をおこなう。首から肩周りの体型とジャケットの形状が合っているか、すなわち首から衿が離れていないか、またはきつすぎているか、肩甲骨があたって、裾が跳ねていないか、だき落ちがないか、袖丈や着丈などの寸法が合っているか、ラペルのデザインバランスが身体と合っているか、ウエストの絞りは適切か、前後の身頃の落ち着きが良いか、腕の運動量が確保され、動かしやすいかなどを確認する。最後に椅子に腰をおろし、ジャケットの衿が首や肩から浮いてしまわないかを確認する。

今回の場合、モデルの左肩甲骨が、右に比べて高かったため、肩線を解いて肩線を7mm程度出し、天幅も広げる修正をした。ウエストも少し絞り、フィットさせた。袖が短かったため、袖口で2cm程度長くした。身頃に色毛で修正箇所を印し、縫い直した。



#### 4-9. スレキの裁断 図11

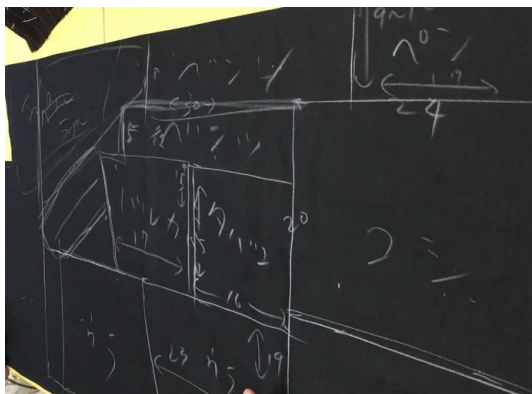


図11 スレキの裁断

#### 4-10. 裏地の裁断 図12



図12 裏地の裁断

#### 4-11. 胸ポケット、腰ポケットの作成

イタリアの胸ポケットは脇上がりで強くカーブした形状をしている。この形状が船底に似ているところから、バルカ（船底）ポケット<sup>図13</sup>と呼ばれている。ポケット周囲3方向の縫い代を内側に織り込みつつ、形状を見ながらまつっていくのだが、角の小丸の出し方は切り込みを仕上がり線の端まで入れて生地を解きながら丸さを出していくために、非常に難しい技術である。

腰ポケットには口切れを当てるが、口切れは少しバイヤス目で裁断した布地の中心端部分を指で押さえてアイロンを引きながら指を一緒に動かし蛇腹にすることで、腰に柔軟に沿うようにしている。

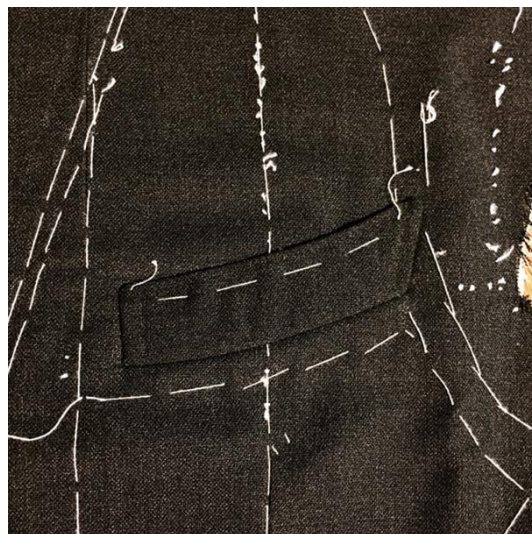


図13 バルカポケット

#### 4-12. 内ポケット作成 図14

メンズ・ジャケットには内ポケットが存在する。レディース・ジャケットにはあまり見られない意匠である。通常は左右胸ポケットと左胸にペンポケットである。今回はオリジナル制作のため、左下にシガレット・ポケット（現在は携帯入れに使われることが多い）を加えた。内ポケットは3mm幅ほどの細い両玉縁にし、右胸ポケットには裏地で三角形のボタンホール付きの蓋をつけた。



図14 内ポケット

#### 4-13. 芯据え(仮縫い後) 図15

芯を見頃に据える。ラペル部分は#60のシルク100%のミシン糸を使用し、手で細かくハ刺しをし、返り線奥は伸び止めとしてスレキの耳を使用し中心を星止め、両脇を千鳥にまつ。ラペル周囲から前端にかけての伸び止めテープはイタリア製の麻テープを使用し、両端をからげまつりした。さらに、ラペル部分には、見返しを据える際、あたりが出ないようにのり抜きの柔らかいスレキをあてる。このように、芯づくりの段階でも、不要な芯地は一切使用せず、極力ソフトな資材を適宜使用し、手作業で留めつけていくことにより、ジャッカ・カミーチャのドレープは軽く、柔らかかに保たれる。



図15 芯据え(仮縫い後)

#### 4-14. 見返し 図16

返り線の伸び止めを毛芯にまつり、前端の縫い代の整理、ポケット作成終了後、内ポケットを作成した見返しをラペル端で返りのゆとり分を残し、躰で止めていく。ゆとり分はチューブのように盛り上がらせ、指の感覚でまつり止めていくが、約

1.0cmのゆとりが入っている。



図16 見返し据え

#### 4-15. 裏地付け 図17

見返しをつけたら、次に裏地をのせていく。裏地はパターンがなく、表地の裏側に乗せてチャコでおおよそ見当をつけて形状を描き、裁断をする。それに縫い代を適当につけて折り込み、白毛で躰ける。ダーツも指の腹でさぐりながら、表地に沿わせダーツをたたみ、白毛で躰ける。ここでも裏地がきつくなならないようにふんわりと据えて、適度なゆとり分約5~7mm位をいれる。躰後は星止めで見返しに止めていく。



図17 裏地付け

#### 4-16. 中縫い(最終フィッティング)

中縫いでは、前回の仮縫い同様にジャケットを組み立て、前回の仮縫いで補正した部分の仕上がり



確認と、ポケットや見返しを作成した状態で、厚みが足りているか、余計な皺が出ないかなどを確認する。

#### 4-17. 見返しつけ、ピクステッチ<sup>注8</sup>

中縫いが終わると、修正部分を再度白毛で縫い合わせる。前身頃と見返しのラペル周囲を抜き差しまつりで見返し端をまつり付ける、さらに、ピクステッチを施していく。

#### 4-18. 肩入れ

メンズ・ジャケットの後ろ肩線上のいせ分量はレディース既製のジャケットと比べ、かなり多い。今回は14mmのいせが入っている。レディース既製のいせ分量が通常7mm程度なので、約2倍のいせ分量である。それをアイロンで丁寧にいせ込み、肩甲骨の高さを出すと同時に肩線が前に移動して、上腕骨頭にスペースができ、腕が動きやすくなる。

肩を縫い合わせる前に、肩線状で前から1/3位のところの芯地を5~6cm切り込み、0.7cmほど切り開く、切り開いた部分は裏地をミシンで止め付ける。そこにバイヤスに切った麻芯を開いた形状に伸ばし、沿わせ、大きめ(2~2.5cm)のハ刺しで芯に止めつけていく。

また、アームホールに対して袖山のいせは約5.0cmあり、レディースの既製服の場合は約3.0~3.5cmなので、袖山のいせもレディース・ジャケットよりかなり多くなっている。今回の袖山はナポリ仕立ての特徴の一つでもある雨降り袖<sup>注9</sup>ほどではないが、それでも多くのいせを入れることで、上腕部の運動量を確保し、腕が動かしやすくなっている。

#### 4-19. 衿作成・衿つけ

仮縫い時の衿はあらかじめ作成してあったゲージを使用した。仮縫い後に衿の作成をする。衿はカラークロスに毛芯を据え、後ろ中心は円を描くようにしハ刺しし、端になるごとにノッチに平行にする。<sup>図18</sup>地衿のくせ取りをして地衿をつけ、衿をころし、上衿のくせ取りをして衿をかける。ゴージラインは渡しまつりをし、ネックラインはまつり、ひげと呼ばれる衿端部分を折り込みかがり、衿外周のカラークロスをかがる。



図18 ハ刺し

#### 4-20. 袖作成・袖つけ

メンズ・ビスポークの仕立ては袖口を本切羽にし、ボタンで開閉できるようにする。袖付けは身頃と袖を中表に合わせ、前の腋点付近から身頃の立体を保ちながら、躰をしていく。工業パターンのように細かく合印が入っていないため、いせ分量も布が自然に落ち着く位置に目検討で親指の腹を使って均等に入れながら縫い合わせていく。いせが逃げないように一針刺すごとに少しずついせを入れ、返し縫いで仕上げる。裏地縫い代を折り込み、身頃のアームホールにまつり付ける。

#### 4-21. ボタンホールかがり

今回制作したメンズ・ジャケットは前中心に2個、左右の袖口に4個ずつ、左ラペル上部にフラワーホール1個、内ポケット蓋1個合計12個の鳩目ボタンホールを手かがりした。

イタリアン・ジャケットの鳩目ボタンホールは手でかがる。今回は穴糸もイタリアで使っている

るものを使用した。図 19 イタリアンのジャケットの手かがりの鳩目ホール<sup>図 20</sup>と日本のジャケットの手かがりの鳩目ホール<sup>図 21</sup>はかがり方が違い、仕上がりの見え方も全く違う。通常日本の工場で使用されている既製のジャケットのボタンホールは日本の手かがりのボタンホールの形状をモデルに作成されたのではないだろうか。また、既製のボタンホールは、専用のマシンを使用する。仕上がりは整っているが、でき上がりの硬さは否めない。一方、イタリアン・ジャケットの手かがりの鳩目ホールは、糸の引きが柔らかいため、仕上がりも柔らかくなりボタンの開閉がしやすくなる。

手かがりのボタンホールの作成手順は、生地針を裏から刺し、針先に穴糸をひっかけ、指で押さえて針を引き抜く。日本のジャケットの鳩目ボタンホールでは針を引き抜く際、手前に引き抜き結び目を締めるが、イタリアン・ジャケットの場合、針先を引き抜き、結び目が立つように糸を前方に引ながら締める。そうすることによって、結び目が立ち、細く、美しいボタンホールになる。ボタンホールの概念が全く違う。



図 19 イタリアで使用されている穴糸



図 20 イタリアの手かがりの鳩目ボタンホール



図 21 日本の手かがりの鳩目ボタンホール



4-22. ジャケット完成（前身頃・脇身頃・後ろ身頃） 図 22 23, 24



図 22 完成した前身頃



図 24 完成した後身頃

4-23. 前身頃着用写真（ジャケット・パンツ） 図 25



図 23 完成した脇身頃



図 25 前身頃着用写真（ジャケット・パンツ）



#### 4-24. 着座時の後ろ衿の吸い付き写真 図 26



図 26 着座時の後ろ衿が首にきれいに沿っている

#### 4-25. ジャケットの工程 (ジャッカ・カミーチャ)

1. 表地裁断
2. 切り躰
3. ダーツ縫い
4. 毛芯作成
5. 芯据え
6. 白毛組み立て (身頃・衿・袖)
7. 仮縫い
8. ポケット表地裁断・スレキ裁断・裏地裁断
9. バルカポケット作成
10. 腰ポケット作成
11. 内ポケット作成
12. ゴージ～前端～裾テープ付け
13. 縫い代整理・まつり
14. 見返し仮止め
15. 衿作成 (ゲージ・白毛)・衿付け
16. 袖作成 (白毛)・袖付け

17. 中縫い
18. 見返し端 (本縫い・まつり・ステッチ)
19. 肩線毛芯切り開き・バス芯据える
20. サイドベンツ作成
21. 衿作成 (ハ刺し、表衿かけ)・衿付け
22. 袖作成・袖付け (アームホール裏地まつり)
23. 手かがりボタンホール
24. 仕上げアイロン

#### 5. まとめ

メンズ・スーツといえばイギリスのサビルロウがひとつの基準として考えられることが多い。しかし、イギリスのジャケットのように芯地を多く用いて作り出す甲冑のような男性的で力強さを表現する構築的な形とは対照的なイタリアン・ジャケットの、体にフィットしたドレープの柔らかさ、軽やかさ、セクシーな魅力に改めて気付かされた。クラシコ・イタリアのブーム以来、イタリア風の服づくりは日本でも一つの潮流として定着しているといえる。本研究ではイタリアン・ビスポークのメンズ・ジャケット製作を通して、「フット・ア・マーノ」(手仕事で作られた)服づくりの高い技術を学び、再確認するとともに、既製服との差異を検証し、サステナビリティの観点から見直され始めている服づくりのありかたを考察した。ジャッカ・カミーチャの仕立て方を学ぶことを通じて、イタリアの服づくり、ビスポーク(イタリア語でスミズーラ)には多くの手仕事による縫製技術やアイロン技術がつまっており、このような手仕事には、服の造形に対する美意識も含まれていることがわかった。例えば、裏地を作成する場合、既製服で作成されるような裏地裁断用のパターンは存在しない。パターンがない分、手加減で生地 of 厚みに見合ったゆとり分量を入れていく。日々、このような訓練(仕事)をしている技術者は、自然に生地 of 厚みや特性を考慮した衣服を制

作することができるのではないだろうか。

本家イタリアのサルトはレディースのジャケットも作っている。日本でも、クラシコ・イタリアブーム当時は、レディース・ジャケットでもパターンの研修会が開催され、様々な研究がなされていた。それ以降、イタリアの物づくりは静かに定着したものの、クラシコ・イタリアのスピリットが定着したとは言い難い。

過去イタリアのスピリットが定着しなかった原因は日本人の既製服に対する概念なのではないだろうか。例えば、店頭にハンガーで吊るした状態がきれいでないで購入に結びつかない、機能を保つために必要な構造的に入る衣服のダーツや皺を嫌い、縫製のしやすさなどにより、作り手（メーカー）は衣服を固め、肩ダーツを無くした衣服が多く製造されてしまったのではないか。この構築的な要素を自然と嫌っていたのは、着物が平面構成であるための過去からの刷り込みであるのではないか。クラシコ・イタリアブームであった当時より、インターネットの普及により、情報があふれており、海外旅行へも気軽に行くことができ、日本人の生活様式は多様化した。服の有り方も、アメリカン・ジャケットのような自分を誇張するパワー・ドレッシング<sup>注10</sup>ではなく、イタリアン・ジャケットのような立体構成が認識され、皺や着馴染みを重視するような、味のあるジャケットが好まれるようになっていくのではないか。それは、何着もの服を次々に取り替えていくのではなく、愛着を持って服をその味（経年変化）も含めて、長く着ること（サステイナビリティ）につながるだろう。また、イタリアのサルトの作るジャケットには特徴（くせ）がある。例えば、あるサルトの作るジャケットは、すべて袖山にいせを多く入れた雨降り袖といわれる袖になっている。イタリアではそれぞれのサルトがスタイルを持っている。日本でもディテールのみが流行るのではなく、衣

服への意識が成熟して人々のライフスタイルの一部になり、味として消化できたら、アパレルメーカーの仕事は、流行にとらわれ過ぎず、意味を持ち、もっと豊かになるのではないか。

本研究では、初めて本格的なイタリアの仕立てでジャケットの制作をおこなった。ジャッカ・カミーチャの軽やかさとは裏腹に、ほとんどの工程が手作業であったため、大変多い工程で時間のかかる作業ではあったが、今まで本で読んでわかっていたつもりの概念を実際にやってみて、そのプロセスが大切であると感じた。また、イタリアの手作りの服づくりの魅力の虜になった。今後も、レディース・ジャケットの軽やかさにメンズ・ジャケットの耐久性や機能を兼ね備えた、スタイルのあるジャケットを研究していく。

現在は、ジャッカ・カミーチャの仕立てに習い、レディースのジャケットを製作中である。ジャッカ・カミーチャと接着芯地を多く用いた既製服の仕立ての両方を作り、その着心地や差異について比較し、理解を深めていきたいと考えている。女性の体型は大きくバストとウエストの寸法差が通常15~20cm前後あるため、より高くせ取り技術が求められる。手間のかかったイタリアン・ジャケットが、使い捨ての衣服の現状を見直し、社会で認められたステイタスを持ち、ライフスタイルを持つ日本の女性たちによって静かに定着していくことを望む。

BFGUにおいて、テクノロジーコースは技術を教えるコースであるため、「フット・ア・マーノ」にみるような手仕事の緻密さ、良さをどのように伝承することができるのか。また、今後、レディースの既製服において、最新の技術と手仕事の技術をどのようにミックスして培われた技術を失うことなく発展させることができるのか、その方法を考えていきたいと思う。

## 6. 謝辞

本研究を行なうにあたり、ジャッカ・カミーチャのイタリアン・ジャケットの縫製方法やイタリアでの仕事や生活の様子を教えていただいたサルトであり、サルトリア・イプシロンの代表でもある船橋幸彦氏、イタリアン・ジャケットの縫製方法や日本のメンズの仕立てについても教えていただいたサルトリア・イプシロンの武田瑤介氏に謹んで感謝申し上げます。

注1. 柴山登光『服づくり大全 正編 パターン』アパレル工業新聞社 2011年、76頁、77頁参照。

注2. ヴィターレ・バルベリス・カノニコ社、通称カノニコ。イタリア・ピエラ地方で1663年創業、世界最古の毛織物メーカーで、価格と品質のバランスがとれた素材として人気がある。

注3. 切麩は「きりびつけ」「きりじつけ」など数種類の呼び方があるが、本研究では柴山氏の以下の文献を参考に「きりびつけ」とした。柴山登光『服づくり大全 続編・補正／縫製／グレーディング』アパレル工業新聞社、2011年、11頁、参照。

注4. 白毛とは未さらしの甘より木綿糸。仮縫いや切麩に使う。

注5. 柴山登光『服づくり大全 続編・補正／縫製／グレーディング』アパレル工業新聞社、2011年、76頁。

注6. 毛芯とは、服を保型するための芯の一種。一般に「芯地」といわれる「接着芯地」のように表地には接着せず、接着芯地が発明される以前の「芯地の原型」といえるもの。ハリ感を出すために、素材に馬の尾毛や獣毛を使用することも多いため、毛芯と呼ばれる。株式会社三景ホームページ

(<https://www.sankeicoltd.co.jp/product/shoulderpad.html>)

注7. サルトリア・イプシロンでは主にウールとコットンの混紡の毛芯をイタリア国内でも特に薄く、軽いものを選び輸入している。  
(<http://sartoriaypsilon.blogspot.com/2013/?m=0>)

注8. ピックステッチとは手で入れる、星止めのステッチのことで、ナポリ仕立てのジャケットに多く使用されており、柔らかな仕上がりにある。

注9. 服の付け根に縦のシワがある袖は、通称、雨降り袖と呼ばれている。片瀬平太・池田哲也『ナポリ仕立て Sartoria Napoletana 奇跡のスーツ』株式会社集英社、2006年、19頁。

注10. パワー・ドレッシングとはビジネスの成功のために、自分をより有能に、より強く見せる装いといった意味で使われることが多い。片瀬平太・池田哲也『ナポリ仕立て Sartoria Napoletana 奇跡のスーツ』株式会社集英社、2006年、14頁。

## 参考文献

柴山登光『服づくり大全 正編 パターン』アパレル工業新聞社、2011年。

柴山登光『服づくり大全 続編・補正／縫製／グレーディング』アパレル工業新聞社、2011年。

片瀬平太・池田哲也『ナポリ仕立て Sartoria Napoletan 奇跡のスーツ』株式会社集英社、2006年。

## 図版

ボタンホール写真

(<http://mottainaimama.blog96.fc2.com/blog-entry-1651.html>)